北海道旭川聾学校（令和７年１１月２７日作成）

富沢小学校との交流

昨日、2025 東京デフリンピックが閉幕しました。日本選手団が過去最高となる 51 個のメダル（16 金・12 銀・23 銅）を獲得し、大きな感動を私たちに届けてくれました。このことはスポーツのイベントとして全国放送のテレビで連日報道され、多くの関心を集めました。聞こえる人や聞こえない人が一緒になって応援している様子には、共生社会に結び付く新たな価値をもたらしてくれたと感じました。

デフリンピックは、100 年目の記念大会だということでしたが、本日、本校に来てくださった旭川市立富沢小学校（１年生から６年生までの 22 名）との交流は、平成７年の開始以来、今年で 30 年目を迎える交流となりました。

富沢小学校との交流は、来てもらったら翌年は出向くという形で、交代交代にお互いの学校を訪問して行ってきた年に一回の交流です。過去には、お互いの学校で給食も共にしていましたが、コロナ禍を経てからなのか給食はなくなったようです。今年度の交流は実質２時間のゲームなどを通した交流となりました。

はじめに、両校の子どもたちが向かい合って対面式を行い、高学年と低学年に分かれて「フルーツバスケット」等のゲームを楽しみました。その後は、小１～３までが大根抜きや鬼ごっこなどの体をたっぷり使った楽しい遊び、そして４年生以上は各学年で交流を深めました。

ゲーム等のレクリエーションが中心の交流でしたが、確かな積み上げられてきたものも感じることができました。

富沢小学校の南向（なさき）校長先生にお伺いすると、交流をする前にろうあ協会の当事者の方から手話を学ぶ時間を設けた上で、この交流に向き合ってくれているとのことでした。確かに、小１から小３のグループを見ていると、学級担任の先生を含めて全員が自己紹介の時に「私の名前は～（指文字）です。よろしくお願いします。」と手話と指文字で挨拶してくれました。嬉しかったですし、感動しました。ただのレクリエーションで終わらせるのではなく、それぞれの児童が学んだことを発揮する素晴らしい場（時間）にしてくれていると感じました。ありがとうございます。

現在、小学校の教科書では、「新編新しい国語　三下」（令和６年度版　東京書籍）で、令和２年度版より手話のイラストが大幅増となり（例：「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」など）、点字と手話表現が見開き２ページで掲載されています。また、「ひろがる言葉　小学国語　四下」（令和６年度版　教育出版）では、「手話であいさつしよう」という教材が見開き２ページで掲載されています。４年生や５年生の道徳の教科書には、点字を発明したフランスのルイ・ブライユさんや日本の点字の父といわれる石川倉次先生（ろう教育にも精通）のエピソードが掲載されているなど、全ての児童が指文字や手話等を学ぶ機会があると考えられます。平成１９年の特別支援教育が開始されて以来、確実に障がいや多様性の理解も進んでいるのです。私たち大人の「普通」もアップデートしていかなければなりません。

全ての日程が終わって、帰る富沢小学校の皆さんを見送るために本校の児童と一緒に私も玄関に並びました。様子を見ていると「ありがとうございました。」という声と共に手話表現が飛び交い、ハイタッチする児童たち。そして、後ろを振り返り「また、会いましょう！」と手話で繰り返し表現してくれる富沢小の児童。こちらをじっと見て目を合わせ、通じるという自信をもって放たれた表現でした。

これからの共生社会の形成に向けて、担い手たちの力強いエネルギーを感じることができ、とても晴れやかな気持ちになりました。これまでとこれからも続く富沢小学校との交流に感謝です。